

## 序 言

## 『法華経』

## ——仏教研究の要

M・I・ヴォロビヨヴァ = デシャトフスカヤ

江口 満 訳

幾世紀を超えてきた文化の歴史には、多くの重要な出来事があった。いつ始まったのか分からない文化も数多い。新しい文化の輝かしい太陽が突然昇ったかと思うと、その光は各地へと広がっていき、それぞれの地域で重要な位置を占めてきた。たとえば、中国に仏教が入ってくるとともにインド文化も伝えられた。東アジアの文化に仏教が多大な影響を与えたのはごく自然ななりゆきだろう。「キリスト教の知識なくしてはヨーロッパ文化を理解することが不可能であるように、仏教を知らずして日本を研究することはできない」(O・O・ローゼンベルク O. O. Rosenberg, 1888-1919)。仏教が朝鮮半島から日本に入ってきたのは、6世紀とされている。しかしこの年代も議論の余地があるようである。

もう一つ、議論の的となっているのは、経典を書いたのは誰かという問題である。仏教経典の中には、ヴェーダやブラーフマナ文献など仏教の基盤となった古代インドの教典と同様に、分裂と対立〔についての記述〕が常に存在している。仏教が生まれた初期の頃は、仏教教団は宗教哲学的体系が確立されておらず、ただ社会やあらゆる執着から離れて清浄で質素な生活様式を重んじる共同体であったが、年月を経るにつれて、それぞれの仏僧たちの道は分かれていった。パーリ語の文献には、森の中で暮らすアーラツニヤカ (āraṇṇaka) という僧と、集落あるいは集落の近くに暮らすガーマンタヴィハーリー (gāmantavihārī) という僧の存在が記されており、それぞれの共同体が独自に定めた規則に従って生活していた。

大乘仏教成立期の共同体においても、同様な対立は見られた。森の中で暮らす僧たちもいれば、現地住民が住む集落、あるいはその近くに住み、住民たちに説法をする僧たちもいた。この2つの集団のうち、どちらが大衆に説き聞か

せる大乘經典をつくることができるだろうか。それは明らかに住民たちに説法をした僧たちだろう。彼らの名前は知られていないし、今後とも知られることはないだろう。

ここに、仏教徒が一樣に尊崇する有名な大乘經典がある。その教えを説く際に、ブッダ自身は、これは初めて説くものであり、これを聞いた者はそれぞれの行いに従って、早晚必ず悟りを得るであろうと予言している。幾世紀もの歲月を経た、誉れ高いこの経が「サツダルマプンダリーカ・スートラ」(Saddharmapuṇḍarīkasūtra)である。

日本の学者が推定するように、『法華經』は、ある一定の時期にすぐに成立したのではなく、長い年月を経て成立していった歴史をもっている。『法華經』の前半部分にある韻文(偈頌。サンスクリットのガーター)は、紀元前に成立したと考えられる。やがて偈頌のテキストは散文(長行)に増広され、後半部分も付け加えられた。おそらく2世紀末までには『法華經』は完成していたと考えられる。この段階でサンスクリット語の『法華經』は27章で構成されていたと思われる。仏教の伝統では、經典の主要な思想はシャーキャムニ・ブッダが入滅したとされる紀元前6世紀ごろから口承によって伝えられてきた。時代区分については様々な解釈があり、ここでその論争を解決しようとする意図はない。肝心なことは、サツダルマプンダリーカ・スートラ、あるいは日本人をはじめ世界各地の様々な民族の人々の言う『法華經』(Lotus Sutra)、を初めて聞いたのは、その伝承に従えば、ブッダの弟子たちであったということだ。弟子たちは、師から伝えられた教えを幾世紀にも及ぶ長大な時間にわたって大切に伝えていこうとした。

前述したように、サツダルマプンダリーカは、多くの他の經典とともにインドで生まれ、おそらくインドで文章化されたと思われる。紀元後3世紀にこの經典はインドの外へと伝えられていき、中央アジアや中国、朝鮮で知られるようになっていった。それを直接証拠づけるものとして、紀元後286年に中国語に訳された最初の經典の翻訳がある(竺法護訳『正法華經』Dharmarakṣa, *Zheng fahua jing*)。『法華經』が、まず中国に伝来し、その後、朝鮮(4世紀)そして日本へと渡った時から、『法華經』伝播の新しい時代が始まった。しかし中国で『法華經』が最も人気を得たのは、406年に鳩摩羅什が翻訳をしてからのことである(『妙法蓮華經』*Miaofa lianhua jing*)。敦煌やハラホトから出土した漢文仏典の写本

を見ると、5世紀から12世紀の間、鳩摩羅什の翻訳が最も人気を得ていたことが分かる。この鳩摩羅什訳法華経は、西夏語にも、後には日本語にも翻訳されたが、このことが当該地域における仏教流布の歴史を特徴づけるものとなった。7世紀初め(601年)、別の漢訳法華経が現れた。ジュニャーナグプタ(闍那崛多 Jñānagupta)とダルマグプタ(達摩笈多 Dharmagupta)の訳で『添品妙法蓮華経』(Tianpin Miaofa lianhua jing)と名付けられたが、敦煌では鳩摩羅什訳ほどの評価は得られなかった。

ストックホルムの民族誌博物館にあるスヴェン・ヘディンのコレクションの中には、流麗な書体(cursive script)で書かれたチベット『法華経』写本がある。日本の学者辛嶋静志は、この写本全体を解説し発表した。これはチベット写本の古いものの1つ(7-8世紀)であり、しかもそれは最初の『法華経』チベット語訳である。これによって、最初にチベットに導入された仏典の1つが『法華経』であったということが判明し、また仏教伝播の歴史に占める『法華経』の重要性を示唆している。その後、長年忘れ去られていたこの写本が出版され、学術研究の対象となったことは言うまでもない<sup>1)</sup>。

『法華経』サンスクリット語写本の断簡が大量に中央アジアのカシュガル、ホータン、カーダリク、ファルハード=ベークで発見されている。これら中央アジア出土の『法華経』サンスクリット語写本断簡の完全なリスト(concordances)はクラウス・ヴィレが東京で2000年に公刊している<sup>2)</sup>。これまでに発見された中で最も古いサンスクリット語断簡は、現在旅順博物館(中華人民共和国, 旅順はかつてポルトアルトゥールと呼称)に所蔵されているものである。そして最も完全に近いサンスクリット語の写本は、サンクトペテルブルクの東洋古文書研究所に所蔵されている。この写本は、カシュガルの領事であったN・F・ペトロフスキー(1837-1908)が入手し、アジア博物館(現東洋古文書研究所)に寄贈したものである。この写本はホータン近郊で発見されたものと考えられる。しかし、写本の正確な発見場所については分かっていない。また、書写年代の確定については多くの議論を呼んだ。

セルゲイ・フョードロヴィチ・オルデンプルク(Sergei Fedorovich Oldenburg, 1863-1934)は、古文書学上の研究では5世紀と推定できると考えた。しかし『法華経』研究の第一人者である日本の学者戸田宏文(1936-2003)は、この写本がもっと後に書写されたものだ と確信していた。この論争には、当時ホータン

語の『ザンバスタの書』(*The Book of Zambasta*)を発刊したばかりであったロナルド・エメリック(Ronald Emmerick, 1937-2001)も加わった。エメリックは、ホータン・サカ語で書かれた写本の奥付の言語学的研究をもとに、写本が書かれたのは9世紀ないし10世紀の可能性が高いという結論に達した。

写本は大判(18×57.5 cm)で396葉からなっていた。完全な『法華経』カシュガル写本は、もともと459葉あったはずで、テキストの内容、および他の学術機関が所蔵している葉の数から推察して、12枚の葉(または断簡)が失われたようである。サンクトペテルブルクに保管されている写本について重要なのは、コロフォン(奥付)があるということだ。正確には、薄い紙本の葉(paper folio)の半分だけが残っていて、そこにはホータン・サカ語(東イラン語)の筆記体(cursive script)で書かれたテキストがある。そして写本の各章の終わりの部分にはホータン・サカ語によるコロフォン(奥付)がある。こうしたすべてのことから、写本の発注者はホータン人であったと推察できる。ジャラプニヤ(Jalapaña)という名前も残っている。奥付によると発注者である男性(あるいは女性)は、亡くなった親族全員の追善供養をしている。そうした事実からすると、写本はホータンで書写されたということになる。従って、カシュガル写本という名前でこの写本は長く知られてきたが、その名称は間違いで、カシュガルの名称を冠したのは、この写本を入手したのがカシュガルの領事であったペトロフスキーであったためである。

中央アジアにサンスクリット語の写本が普及していた時代に、『法華経』のテキストに加えられた変更は明らかにそれほど多くはない。それは、このペトロフスキーが入手したホータン由来の『法華経』写本と、その他の『法華経』写本の断簡を比べてみても分かる。サンクトペテルブルクのコレクションには、そうした『法華経』の断簡が少なくとも10ある。その中には、カラーの細密画で装飾されているものもある。

### 法華経と日蓮

さて6世紀に日本に仏教が伝来した時、日本の古来の宗教儀礼との間に摩擦が起こった。日本は多くの点においてユニークで驚嘆すべき国である。日本人は、生まれながら礼儀正しさを具えており、より誠実な丁寧さがある。その反面、侍のもつ鋭い刀や勇気、大胆さといった側面もある。日本人は、日常の喧

騒から離れて、偉大なる自然を感じ、心の平安を見いだすことができる。日本では、古来から超自然的な神々や霊を敬う習慣があった。その宗教を神道という。神道の歴史は、各地域の種族の文化と、自然を特に愛する心の融合によって出来上がっていった複雑なプロセスである。仏教伝来以前の古代日本における神道は、祖先を崇拜し、氏族内の団結を大切にすると同時に、大地や雨、風、森林、山の神々を崇めるものだった。神道は、やがて新来の宗教である仏教と共存し、影響を受けて大きく変容していく。また仏教の教えも日本においてユニークな特徴をもつようになる。

日蓮（1222 - 1282）という思想家・哲学者が現れるまでの日本はそのような時代が長く続いた。日蓮の名はヨーロッパの哲学者にはそれほど知られていない。もっとも日本での『法華経』の普及の歴史において、日蓮は『法華経』を聖典化する主要な役割を果たした。創価学会の根本教義は日蓮の『法華経』解釈が基礎になっている。日蓮という名前自体、日本語で「太陽」と「蓮」を意味する。

日蓮は長い道のりを経て『法華経』にたどり着いた。彼は少年時代に天台宗の寺、清澄寺で仏教を学び始めた。その後、比叡山、高野山、園城寺などで天台、真言など各宗派の教義を学び、可能なかぎりの経典を閲読した。しかし、どの教えも日蓮を満足させることはなかった。そして1253年、日蓮は、仏の言葉と成仏の教えが正しく伝えられているのは『法華経』のみであるという結論に達した。

日蓮の生涯は波瀾万丈であった。彼の『法華経』解釈は受け入れられず、彼自身には、さまざまな誹謗中傷があびせられ、迫害が加えられた。一度斬首されそうになったが、権力者は彼を殺すことはできなかった。それは権力者が処刑を取りやめたのではなく、自然そのものがこの不正義を妨害したのである。まさに処刑されようとする瞬間に、暗い夜空に飛行物体が現れ、地上に向かってものすごい速度で近づいてきたのである。刑吏たちは、これを天の警告であると受け止め、日蓮を置いたまま、逃げ出してしまった。この後、日蓮は佐渡へ流刑となる。彼は、これが自身の悟りの証明であったのだと受け止め、伝道者としての独自の道を歩んでいった。日蓮は、『法華経』の中に仏の究極の教えを見いだしていた。そして、その教えの根本を人々が分かるように説いていった。それは本質的に、日本において初めて現れた『法華経』の最も重要な哲学

的な解釈であった。日蓮の『法華経』解釈は、その当時の他の解釈とは多くの点で異なっている。日本では *The Writings of Nichiren Daishonin* という全2巻、2608ページにのぼる日蓮の英訳著作集が出ている。それをもとに、『法華経』を奉じ、宗教的シンボルとした日蓮の教えの根本教義について概観してみたい。

日蓮は、人間一人ひとりに悟りを開く可能性があり、一人ひとりの人間が仏になれるのだということを信じ、弟子たちに説いていった。これは大乘仏教の根本思想の1つであり、日蓮はそれを全面的に主張していた。悟りを開くための手段として、彼は当時としては全く新しい方法を提唱した。すなわち南無妙法蓮華経という題目を普遍的な法として唱えることである。この題目は、民衆が仏の知恵をあがめる信仰の対象として「御本尊」という曼陀羅の形でも表された。日蓮は幅広い層の人々と書簡を交わし、悟りの意味について説き、自ら「御本尊」を書きあらわしていった。多くの宗教において、神・尊格の表現は重要事であり、時として論争的ともなる。日本にも数多くの仏像や図像があり、生きた仏として崇められていた。日蓮は、この問題について、時間をかけて思索した。

仏には32種類の特別な相があることが知られている。そのうちの何種類かは、描写することが可能である。しかし、大半の相は、実際の仏の姿でしか確かめることはできない。たとえば、仏はどんな声をしているか、いかなる発想をするのかを描き出すことはできないし、心に染み入るような眼差しを伝えることはできない。どんな絵も仏の姿をそのまま描き出すことはできない。仏の描写が実際の姿そのままであると書かれている経典は読む者を迷わせてしまう。しかし、もし31の相が描かれた仏の絵の側に『法華経』を置くならば、純円の教えを体した仏の姿を得ることができることになる。その理由を日蓮は次のように説明する。「法華経の文字は仏の梵音声の不可見無対色を可見有対色のかたちと・あらはしぬれば顕形の二色となれるなり、滅せる梵音声かへつて形をあらはして文字と成つて衆生を利益するなり」[法華経の文字は、仏の梵音声という不可見無対色(目に見えず、空間を占有しない)を、可見有対色(目に見え、空間を占有する)の形にあらわしたので、顕色(色彩)と形色(形状)の二色となったのである。消滅した梵音声がかえって形をあらわして、文字となって衆生を利益するのである]([木絵二像開眼之事])<sup>3)</sup>。

日蓮にとって、経典に表された仏の言葉は、仏自身の生きた声なのである。

これは、仏像では表現できない仏の32相のうちの1つと言えるだろう。『法華経』に表現された仏の言葉、生きた声は、日蓮にとってはあらゆる荘嚴な寺院よりも重要なのである。この日蓮遺文（御書）の一節は、『法華経』の第16章、如来寿量品（Tathāgatāyuspramāṇa-parivarta）にそのまま当てはまる。そこには、仏は常にこの世界に住して、人々の中にいる、仏は宇宙でもあるが、人々の目には決して見えないし、人間の姿はしていない。人々を災難から救う必要がある時のみに現れるのである。災難からの救済は、『法華経』の第25章、觀世音菩薩普門品（Samantamukha-parivarta）に出てくる。東洋古文書研究所の写本コレクションには、命に及ぶような危難に遭った人を菩薩が救う様子を描いた32点の挿絵入りの小さな西夏語木版本が所蔵されている。

日蓮は、『法華経』の卓越性を説明する中で、人間が言葉を介して他者の考えを知るということに、言及している。物理的な現象が精神を表し、そして物心両面の性質が一つの融合した形となる。『法華経』に書かれた仏の思考は、物理的には違う形となって聞く人に伝わる。しかし『法華経』を読む人は、言葉を読んでいるのではなく、仏の思想を感じているのである。日蓮の教えは、奇跡を起こすことができる言葉の力を心から信じていた時代の意識レベルのものである。奇跡を起こす言葉の力を信じる心は、今も存在している。

仏教哲学は、生き物（衆生）の精神的、心理的な領域のみを扱っていて、物質世界を対象とはしていないことが知られている。この領域は、日蓮がもともと所属していた天台宗で詳細に説かれている。中国の天台大師智顛（538 - 597）は「一念三千」という哲学の大系を打ち立てた。日蓮はこの仏教概念を人間の精神状態を規定するために使っている。人の心は移ろいやすく、瞬間瞬間に三千の状態を呈する。こうした概念は、『法華経』だけではなく、現代の仏教哲学にも特徴的である。生きている存在（衆生）の1つ1つの器官、細胞1つ1つが同時に喜怒哀楽のさまざまな状態を味わっている。その結果として、成長や発展を遂げていき、最高の状態にまで到達し、その後少しずつ下降していき、消滅していく。日蓮はそのプロセスの瞬間、瞬間を調整していくことを呼びかけている。経典が人をより若くしてくれるわけではないが、精神は強くなっていく。経典は、人が老いても、若い時と同じような力強い精神状態をつくってくれる。経典は物理的な終末へ導くのではなく、成仏へと導いてくれる。仏性を開いてくれる。このような生きとし生けるものの精神的プロセスの本質的な

解明は、仏教では初めてであり、それは日蓮の出現を待たねばならなかった。

彼は『法華経』を究極の経典とし、その本質を一仏乗に見た。一切衆生を救えるのは、小乗でも、大乘でもなく、縁覚乗でもなく、一仏乗なのである。日本の専門家辛嶋静志は、『法華経』が、インドの庶民の言葉であるプラークリット (Prakrit) からサンスクリットに翻訳された際に間違いが生じた指摘している。「乗」という意味のサンスクリット *yāna* と「知識」という意味の *jñāna* は、インドの庶民の言葉であるプラークリットでは同じ語形 *jāna* であった。論理的に考えると、「小さな乗り物」・「大きな乗り物」より「劣った智慧」・「大いなる智慧」の方が意味的にはより通る。もちろん、この仮説をすべての専門家が支持しているわけではない。

『法華経』の第5章(薬草喻品 *Auṣadhī-parivarta*)には、大きな雲が雨を降らせて草木を育むように、仏が衆生を成仏へと導いていくことが説かれている。仏が、天・人・阿修羅に大音声によって説法をするのだが、それはあたかも大雲が空を覆い、三千大千世界全体を包み込み、雷鳴を轟かせるごとくである。仏は、まだ彼岸に到達していない者を彼岸に導き、まだ解脱を得ていない者を解脱させる。そして涅槃を得ていない者には、涅槃を得させるのである。

### 梵文『法華経』研究の歴史

ここで19世紀前半に始まったヨーロッパでの梵文『法華経』研究の歴史をみることにしよう。その当時、パリ語の写本や、インドのデーヴァナーガリー文字で書かれたサンスクリット写本、ペルシャ語、アラブ語の写本の研究が盛んに行われていたが、古代インドのブラーフミー文字で書かれた早い時代のサンスクリット写本についてはまだ知られていなかった。ヨーロッパで梵文『法華経』の研究を始めたのは、フランスの学者ウジェーヌ・ビュルヌフ (Eugène Burnouf, 1801-1852) である。彼はインドの宗教、サンスクリット語、そして何よりも仏教に惹かれていた。彼が自身の研究計画や、研究上の発見、関心について家族や同僚、友人に書いて送った書簡が大量に残されている<sup>4)</sup>。ビュルヌフの生涯において大きな役割を果たしたのが、サンスクリット写本の入手を助けた友人のイギリス人ブライアン・ヒュートン・ホジソン (Brian Houghton Hodgson, 1800-1894) である。ホジソンは、東インド会社の社員としてカトマンズとダーズリンで働き、後にネパール駐在公使 (Resident in Nepal) になった。仏教に通暁

していた彼は仏教写本と芸術関係の文物を集めた。ホジソンは、ネパール写本のデーヴァナーガリー文字への転写を注文し、ビュルヌフに送った。この転写された写本は、ビュルヌフのコレクションの一部となった。ビュルヌフは、まだ若く、体が弱かったが、インド学者、サンスクリットの専門家として精力的に仕事をした。1832年、彼はパリのアジア協会の書記に任命された。1836年に彼は書記としてアジア協会の年間活動報告を初めて書いた。また、高等師範学校 (École normale supérieure) で一般言語学、比較言語学の講義も行った。ビュルヌフは仏教哲学、仏教文化にも関心を寄せていた。彼はこれらの学問分野を1つの総合分野として捉えるべきであると考えていた。

この頃にはヨーロッパでも『法華経』が中国語文献とチベット語訳によって知られており、彼はこの經典に対し特に高い関心をもっていたのである。『法華経』は、彼がかくも求めていた総合的学問的価値が凝縮された經典だった。1837年4月、カトマンズのホジソンから小包が届いた。中にはデーヴァナーガリー文字で書写された34本のサンスクリット写本が入っていた。その中に『法華経』も入っていたのである。(この写本は今パリのアジア協会図書館に所蔵されている。) ビュルヌフは、すぐに『法華経』の翻訳にとりかかった。1837年4月20日前後、彼の手元には写本は1部しかなかったが、この頃から翻訳を始めた。1845年、ホジソンはカトマンズからさらに2つの写本を送ってきた。それはビュルヌフのコレクションの一部となった。(後にパリの国立図書館の所蔵となる。) 残念ながらビュルヌフがその写本を見たのがかなり遅く、その時点で、すでに最初の写本の翻訳を終えていて、一部は既に印刷に回っていた。彼にとって新しい写本の出現は大きな衝撃だった。そして新しい写本の読みをできるだけ注 (Notes) や付録 (Appendices) で活用できるように全力を尽くした。ビュルヌフは病気で弱った体を鞭打ちながら、昼夜を分かたず働いた。まるで自分がもう長くないことを感じていたかのように、これまでにずっと夢見てきたこの翻訳を終えることを急いだ。1837年10月、ビュルヌフは既に248葉のうち233葉の翻訳を終えたことをホジソンに伝えている。

1852年出版の仏訳『法華経』よりも前の1843年に、上述の第5章 (Auśadhī-parivarta 漢訳の「薬草喻品」に相当する) の翻訳が発表された。彼はこの章を「薬草」 (Herb) と名付けた。この章は哲学的にはかなり難解な内容であるが、巧みな比喻によって仏教徒は仏の教えを容易に理解できるようになっている。翻訳を印

刷に回しながら、彼は自分の訳が上手くないのではないか、未熟な専門家としての評価を残したくないと非常に心配をした。1852年5月28日、ビュルヌフは翻訳の印刷ができあがる前に逝去した。

ビュルヌフの膨大な注釈付きのフランス語訳『法華経』(*Le Lotus de la Bonne Loi, traduit du sanscrit, accompagné d'un commentaire et de vingt et un mémoires relatifs au Bouddhisme*, 1852)は、1世紀半も前に出版されたものであるにもかかわらず、今でも最良の翻訳である。1854年、もう1人のフランスの東洋学者フィリップ・フコー(Philippe-Édouard Foucaux, 1811-1894)は『法華経』第4章「長者窮子の譬喩」の仏訳をサンスクリット語とチベット語を対照させて出版した(*Parabole de l'enfant égaré, formant le chapitre IV du "Lotus de la Bonne Loi"*)。しかし、それはビュルヌフの翻訳のような成功は収めなかった。フリードリヒ・マックス・ミュラー(Friedrich Max Müller, 1823-1900)編集の「東方聖典叢書」(*The Sacred Books of the East*)シリーズの第21巻として、1884年、オランダの東洋学者ヨハン・ヘンドリック・カスパル・ケルン(Johan Hendrik Caspar Kern, 1833-1917)は『法華経』の英訳を発表した。1876年、オックスフォードのマックス・ミュラーのもとへ日本の浄土真宗から南條文雄(1849-1927)が留学のために派遣された。南條は帰国後、日本を代表する仏教学者となり、日本におけるサンスクリット学の創始者となった。法華経のネパール系写本を閲覧した南條は、数点の写本を校合し、1つのテキストを作り上げた。そして、将来の出版のために、ケルンに渡したのである。この2人の共同研究の成果は、初の法華経の校訂本となった。有名なロシアの学者S・F・オルデンプルクが刊行した「仏教文庫」(*Bibliotheca Buddhica*)シリーズ(第10巻、サンクトペテルブルク、1908-1912)としてロシアで出版されたのである。ペトロフスキーがカシュガルで入手した梵文『法華経』写本がサンクトペテルブルクにもたらされて以来、『法華経』への関心は著しく高まった。この写本は、『法華経』のほぼ全体であり(ただ一部の断簡(複数)には火事で焼けた跡が残っている)、今日知られている中央アジア出土梵文写本のうち、これが最も完全に近いものである。それ以外の『法華経』断簡は、ロシアのサンクトペテルブルクにある断簡(10点)を含め、大半が様々な写本の断片にすぎない。

1931年にカシミール地方のギルギットで全く異なる系統の梵文『法華経』写本(複数)が発見されたが、これらは『法華経』ギルギット写本と呼ばれるよ

うになった。そのカラーファクシミリ(写真)版が、2012年インド国立公文書館、創価学会、東洋哲学研究所の共同出版として上梓された。

このホータンで発見され、ベトロフスキーによってサンクトペテルブルクにもたらされた『法華経』写本は、2度ファクシミリ版が出版された。1955年、設立されたばかりのインド文化国際アカデミー理事長のラグ・ヴィーラ (Raghu Vira, 1902-1963) に、この写本のマイクロフィルムが当時のソ連から贈られた。そのマイクロフィルムを使って、1976年に写本のファクシミリ版が「シャタピタカ・シリーズ」の1冊として発表された。しかしそれはあまり成功したとは言えなかった。断簡の取り違えがあったのである。1977年に、これと同じ版が日本で再版された。日本の梵文『法華経』写本の専門家戸田宏文は、この中央アジア出土梵文『法華経』写本をローマ字に転写し、『中央アジア出土・梵文法華経』(Saddharmapuṇḍarīkasūtra: Central Asian Manuscripts: Romanized Text) として1981年に出版した。同書は国際的に高く評価されている。

### 『法華経』と創価学会

『法華経』は創価学会にとって所依の經典である。池田大作創価学会インタナショナル会長は、仏教の教えの意味するところを現代社会に展開して説いている。

池田氏は『法華経』の講義をロシア語で出版した。ロシア語版の名称は『生死の秘法：「法華経」の対話』(«Сокровенный закон жизни и смерти: Беседы о “Сутре Лотоса”») という。その題名自体が語っているのは、世界の調和、助けを求めるすべての人々への尊敬、自分の人生を正しい軌道に乗せ、他者にもその手助けをすることができるような啓発的な内容である。彼は、自身の中に仏界をあらわし、戦争も民族の対立もない、善なる新しい世界の創造に貢献している人物である。

我々が住むこの地球は、本来美しさと調和に満ちた世界である。果たして、人間の過大な欲望のためにこの美しさと調和に満ちた世界を破壊していいのだろうか。緑したたる生態系と秩序を破壊しなければならないのだろうか。『法華経』には、世界が混乱し、人々が苦悩している時、救済の手が差し伸べられると説かれている。池田氏がこれまで法華経および仏教に基づいて発表してきた、現代の諸問題に関する様々な提言を実行するならば、人類は破滅しない<sup>5)</sup>。

空を見上げればわかる。星が輝いている時、私たちは宇宙の広大さと調和を知る。法華經の説く三世十方の諸仏、諸菩薩も、生きとし生けるものの幸福と繁栄を願っている、人類および生物の調和ある生存を願っているのではないか、ということ星の輝きは教えてくれる。『法華經』には、釈尊が自問していて、答えのない問いがある。「生きとし生ける者たちが究極の道を歩み、そのままの姿で成仏できるために、私は何ができるであろうか」(取意)。池田氏は自身の生涯を通してこの問いに答えている。

注

- 1) Seishi Karashima, “An Old Tibetan Translation of the Lotus Sutra from Khotan: The Romanized Text Collated with the Kanjur Versions” (1)–(4), *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University*, vols. 8–11, 2005–2008.
- 2) Klaus Wille, ed., *Fragments of a Manuscript of the Saddharmapuṇḍarikasūtra from Khādaliq* (Tokyo: Soka Gakkai, 2000), pp. 145–183, Concordances.
- 3) 『日蓮大聖人御書全集』(東京: 創価学会, 1952), 468 – 469 頁 / *The Writings of Nichiren Daishonin*, vol. 1 (Tokyo: Soka Gakkai, 1999), p. 86.
- 4) それらはパリの国立図書館に保管されているが、残念ながら完全に整理されているわけではない。アンリ・レオン・フェール (Henri Léon Feer, 1830–1902) がデュルヌフの手紙の研究と出版に尽力した。現代においては、日本の学者湯山明が、デュルヌフについて大部の著書を出している。Akira Yuyama, *Eugène Burnouf: The Background to His Research into the Lotus Sutra*, *Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica*, vol. 3 (Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhism, Soka University, 2000).
- 5) (和文) [http://www.sokanet.jp/sokuseki/koen\\_teigen/](http://www.sokanet.jp/sokuseki/koen_teigen/); <http://www.sokayouth.jp/proposals.html>;  
(英文) <http://www.daisakuikedada.org/main/peacebuild/peace-proposals/pp2013.html>.

(M. I. Vorobyova-Desyatovskaya / ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所  
南アジア研究学科長)

(訳・えぐち みつる / 東洋哲学研究所委嘱研究員)